



子どもと大人の出会い

去る8月27・28日、キッズ・ミート・アート2016を、應典院とバドマ幼稚園にて開催いたしました。今年は「みえないもの?ざわれないもの?」というテーマで、共催の城南学園大阪総合保育大学・大阪城南女子短期大学の先生方をお迎えし、クラシック音楽、願いことを込めたお地蔵さまの造形、身体を使ったワークなど、計4つのプログラムを行いました(各プログラムの報告は、應典院HP内コラムをご覧ください)。また、両日とも設置された食事コーナーでは、美味しいカレーやオーガニック・スイーツが訪れた人々の元気を満たしていました。

かたちを持たないものに対する子どもの感性が大人を触発し、一方、大人の技術が子どものイメージがかたちを持つことを支援する。アートを通して子どもと大人の協働が導かれる、そんな新鮮な驚きとともにする二日間となりました。自らの声や指先を感じ、隣人の願いごとを想像する、まさに「お寺×アート×子ども」にふさわしい、健やかで濃密な時間が流れました。

去る9月8日、2017年5月から開催予定の「應典院舞台芸術大祭space×drama〇(わ)」実行委員会が、歴代space×drama優秀劇団メンバーを中心に発足しました。2016年度をもってspace×dramaは一旦終了し、舞台芸術祭の次の形を模索する段階に入りましたが、これまでの総括と継承を試みるべく、今回から実行委員会形式で開催までの準備を進めてまいります。

第1回目のミーティングでは、顔合わせとコンセプトの共有、実行委員長の出選などを行いました。今後の会議では、具体的な企画案を協議しつつ、広報面での話し合いなどが行われる予定です。



和をもって、輪をかたちづくる

大学生が見据えた生と死



9月17・18両日、第3回大阪短編学生演劇祭が本堂ホールにて開催されました。今年は大阪だけでなく、京都の学生劇団からも参加があり、全6劇団での公演となりました。観客賞に京都で活動する劇団の大阪組「現逃劇場」が、そして優秀賞には「劇団カマセナイ」が選出され、幕を閉じました。

「劇団カマセナイ」脚本担当である小野明日香さんは、ハイスクールOMS戯曲賞で優秀賞を受賞するなどの経歴があり、大学生となった今、高校生の時に書いた作品を等身大に表現しなおした作品を上演しました。30分という限られた時間で「生と死」という主題を扱い、親友の死を受容する過程を描きました。



灯

Report

暮らしの中の生死に ケアと宗教の交点を見る

人生の最期に向き合う

大連寺・エンディングを考える市民の会との協働により、死生観を見つめなおす場として毎年開催している「エンディングセミナー」浄土宗平和賞受賞記念セッションとして、時期を秋に移した今回は、「もうひとつの」終のすみか「ホームホスピスから家族・地域を考える」と題し、2016年3月に奈良県初となる「ホームホスピスみぎわ」を開設された、NPO法人みぎわ副理事長の櫻井徳恵さんにご登壇いただきました。

9月24日、会場の大連寺客殿が満堂となる54人の参加者を迎え、第一部では櫻井さんによる講演を行いました。「人生の最期をどこで迎えたのですか?」と切り出された櫻井さんは、昭和50年を境に病院での看取りが一般的となり、死が私たちの手の届かない場所に隠されていったこと、また、病の治療が優先されるのではなく、生の尊厳こそが大切にされなければならぬことを話され、病院や施設は最期にふさわしい場所ではないと問題提起されました。

ホームホスピスとは、在宅での最期を望みながら叶えられない方に対して、自宅に近い環境で終末介護サービスを提供する場所を指します。その基本理念は「本人の意志の尊重」「安心できる環境の中で暮らすの継続」「最期まで生を全うできる、悔いの残らない看取りの支援」「医療・介護の専門職やボランティアなど、多様な人々による生活の支援」「死への過程を、今を生きている人とともに歩む(看取りの文化の涵養)」の5つ。これらの理念に沿って柔軟なケアを行うため、あえて国の制度の枠組みに則っていないといえます。実際に写真を映しながら、日々の暮らしや看取りの様子について、具体的かつ丁寧にお話をいただきました。

信仰心がケアを支える

休憩を挟んだ第2部は、奈良県ホスピスとがん医療をすすめる会会長 浦嶋偉晃さん、大連寺・應典院住職の秋田光彦を交えて、櫻井さんとの対話セッションを持ちました。緩和ケアの普及に向けて活動されている浦嶋さんは、母親の介護経験から既存のシステムに疑問を持ち、オルタナティブなケアの場としてホームホスピスにも大きな関心を寄せていると大きな声で話されました。ケアとは「他人の世話がやける人」にしかできない行為であり、そのような利他的な人々を少しでも増やすことが自分の使命だと発言されました。

一方、秋田住職からは「家族のような関係でケアをしていると、嫌になつても逃げられない。体力的精神的にハードな現場だと察するが、どの

ような使命感をお持ちなのか?」と問いかけがありました。実は「みぎわ」の理事長は牧師であり、スタッフも全員クリスチャン、その名称も憩いの水際(みぎわ)に由来しているという一筋が聖書にあることによ来しています。櫻井さんは神様から与えられた仕事だと思っている。すべて神様にお任せしているの、パン・アウトすることはありませんが、心強く応答されました。スタッフが信仰を明らかにすることで、自身の信仰に目を向ける人居る方もいます。

最後に、秋田住職は「かつて仏教にも、仲間を看取る二十五年三昧会」という結社があった。今日のお話とはケアの原初に立ち戻っていると思うし、「みぎわ」には日常生活をもとにするという儀礼がある。(看取りの文化とは、私たちが取りこぼしてきたものを拾い集める営みだと感じましたと締めくくりました。宗教が私たちの生死を支える資源となりうることに、大きな気づきを得る時間となりました。



緯……

Interview

大休真紀子さん (森林浴 企画・代表)

應典院にバーチャル社会が誕生!?
互いのちがいを面白がりながら、
自由な観点で生きることに誘う。

組織化しない劇団「森林浴」は、コモンズフェスタ2017参加企画として、1月13日から17日まで「指紋は象のはたけ」バーチャル社会in應典院を開催します。この5日間、應典院がひとつの町に変貌し、そこで演劇公演をはじめとする様々なイベントが行われます。代表の大休真紀子さんにお話を伺う中から、演劇に対する独自の視点と世界観を感じることができました。

——まずは、演劇をはじめたきっかけを教えてください。

大休 子どもの頃から「自分のことばが伝わらない」と思っていました。通っていた幼稚園で、怒っていることが周りに理解されず、怒りを伝えるために火山の絵を描いただけですが、たまたま見られるだけで終わってしまったのを感じています。それから文章や詩を書くことが好きになり、自分が書いたものを他人に読んだり演じたりしてもらうと、うまく想いが届くことに気がしました。

——組織化しない劇団」とあるのは、どういうことなのでしょう。

大休 組織化する方が合理的です。でも、私には「対一」で向き合う関係性が楽しかったんです。個人との



▲森林浴・稽古の様子
(2016年3月＝森林浴アトリエにて)

組織化しない劇団「森林浴」は、コモンズフェスタ2017参加企画として、1月13日から17日まで「指紋は象のはたけ」バーチャル社会in應典院を開催します。この5日間、應典院がひとつの町に変貌し、そこで演劇公演をはじめとする様々なイベントが行われます。代表の大休真紀子さんにお話を伺う中から、演劇に対する独自の視点と世界観を感じることができました。

——まずは、演劇をはじめたきっかけを教えてください。

大休 子どもの頃から「自分のことばが伝わらない」と思っていました。通っていた幼稚園で、怒っていることが周りに理解されず、怒りを伝えるために火山の絵を描いただけですが、たまたま見られるだけで終わってしまったのを感じています。それから文章や詩を書くことが好きになり、自分が書いたものを他人に読んだり演じたりしてもらうと、うまく想いが届くことに気がしました。

——組織化しない劇団」とあるのは、どういうことなのでしょう。

大休 組織化する方が合理的です。でも、私には「対一」で向き合う関係性が楽しかったんです。個人との

Column

「山口洋典前主幹の10年を辿る」

第5回 人を大切にしてもらった

一般的に劇場は「黒くて四角い」ものです。一般的にという表現がどこまであたるかはさておき、應典院はご存じの通り「白くて丸い」のです。そこが、空間としての應典院に興味不尽きない大きな要因です。

公演を親に行かれて「暗幕」を目にされることは多いと思います。それは「そこにはなにもない」という、演じる側と観る側の暗黙の約束事によって存在することがあります。最初に暗幕を使った演出家が誰なのか存じ上げないのですが、初めて暗幕を観たお客さんは「なんだ、あの黒い布?」と思ったかもしれません。

誰かが考えたであろう「なにもない」という表現を拝借し続けている訳です。そうすると、應典院の白壁に暗幕を吊るすのにどうにも疑問がぬぐえなくなり、ある時から暗幕ではなく白幕を「なにもない」表現として吊るようになりました。

山口さんには、そんなボクたちと、どこでもやれることではなく、白くて丸くてご本尊のいらっしゃる應典院のこの空間でしか成立し得ないものがあるのかを一緒に模索していただきました。満月動物園の15周年記念パンフレットには「劇場として(だけ)ではなく表現の拠点として場づくりにあたらせていただきました」と寄稿してくださっています。

アカデミックでもないし、興行的でもないし、演劇の最先端でもないけれども、いわば「市井の演劇」の可能性について一緒に模索し続けようとしていた。空間空論ではなく大阪を拠点に活動を続ける演劇人たちと為し得る実践について、真摯に向き合ってくださった姿勢に突き動かされる10年間でした。

演劇そのものや演劇を何かに活用することよりも、演劇をやる人たち、演劇を観る人たちを大切にしていたできました。それが、應典院が単なる貸館でもなく、大阪の演劇人たちから遊離することもなく、異彩を放ち続けているひとつの大きな理由なのだろうと思います。



撮影:今田修二